

西けりまうライオニスウラフ

①

「法沢堂」一日一言

今我年七十九

p182

11月5日 紳士君子の条件

「論語」三章

「子貢問君子。子曰。先行其言。而後從之。」
「子曰。人不知。而不愠。不亦君子乎。」
「子曰。馬牛犬豕。與人不同。而不可食。君子不可不食。而不可不食。斯謂之君子矣乎。」
子曰。内有不疚。夫何憂何懼。 (新編)

p187

11月15日 先生後樂

「廟堂の^{びやうどう}高きに^お居りては、則ち^{すなわ}其の^そ民^{たみ}を^{うれ}憂い、江湖の^{こうこ}遠きに^お処りては、則ち^{すなわ}其の^そ君を^{うれ}憂う。」

居^お廟堂之高、則^{すなわ}憂^{うれ}其^そ民、處^お江湖之遠、則^{すなわ}憂^{うれ}其^そ君。
(范文正公「岳陽樓記」)

朝廷の^{てんてい}高い位の役人となつても、民衆のこ
とは忘れず心配してやる。反面、江湖の^{こうこ}遠い
田舎に遠ざけられた在野の^{ざい}時代でも、都のわ
が君を^{うれ}憂う。

これが丈夫の^{じやうぶ}常の道である。(范文正公
「岳陽樓記」)

「物を以て喜ばず、己^{おの}れを以て悲しまず」
を参照。

天下の^{てんか}憂い^{うれ}に先^{さき}だちて憂い、天下の^{てんか}樂^{たの}しみに後^{おく}れて樂しむ。

先^{さき}天下之憂^{うれ}而憂、後^{おく}天下之樂^{たの}而樂。
(范文正公「岳陽樓記」)

憂うべきことがあれば、世の中の^よだれもま
だ氣のつかないうちにこれを^{うれ}憂い、また、樂

しむべきことがあれば、まずすべての人を樂
しませて、自分は最後に樂しむ。(范文正公
「岳陽樓記」)

これがいわゆる先憂後樂の士である。

「物を以て喜ばず、己^{おの}れを以て悲しまず」
を参照。

范仲淹 (984-1052) 北宋の政治家、学者、文正公。
情熱的な豪傑の士。古風にすむ。岳陽樓記。
有名「先憂後樂」→後樂の園

p.193 11月26日 歲月人と待ちます

。陶淵明の詩 別紙 ↓ ③ ④

p.202 12月10日 近き向上と心算を

。子曰、齊月一變、至於魯。
魯一變、至於道。 (雍也第六十二)

p.211 12月28日 晩年と美しく

。澁沢栄一翁の好きな言葉

「天意夕陽ヲ健ニ、
人間晩霽ヲ中ニ」

澁沢栄一 一日一言 人間力を高める言葉

澁沢栄一 著



致知出版社

澁沢栄一 一日一言



致知一日一言
シリーズ⑤

人間力を高める言葉

澁沢栄一 著

中3 雜 詩

陶 潛

雜 詩

人生根蒂無し

飄として陌上の塵の如し

分散して風を逐うて転ず

此れ已に常の身に非ず

地に落ちて兄弟と為る

何ぞ必ずしも骨肉の親のみならん

歡を得ては当に樂しみを作すべし

斗酒比隣を聚む

盛年重ねて来らず

一日再び晨なり難し

時に及んで当に勉勵すべし

歲月は人を待たず

人生無根蒂

飄如陌上塵

分散逐風轉

此已非常身

落地爲兄弟

何必骨肉親

得歡當作樂

斗酒聚比隣

盛年不重來

一日難再晨

及時當勉勵

歲月不待人

(上平声十一真韻)

【作者】 陶潛 (三六五—四一七) 潯陽柴桑(江西省九江)の人。字は淵明という。一説に字は元亮、

また一説に名は淵明、字は元亮ともいう。曾祖父は晋の名將陶侃であり、母方の祖父は孟嘉である。

当時の貴族社会では、北から来た門閥貴族が幅をきかせ、陶氏のような土着の家柄はあまり尊敬さ

れず、彼は世に出るのに大きな制約を背負っていた。しかも若くして父を失い、貧困の中で成長し

た。そのため二十九歳の時、ようやく江州の祭酒(教育をつかさどる職)になる。以後、十三年間、

断続的に官吏生活を転々として続ける。四十一歳の十一月、彭沢の県令を最後に帰郷し、以後は二

度と出仕することなく、六十三年の生涯を終えた。県令をやめて故郷へ帰った時の作に「歸去來

辭」がある。故郷の田園では、自然の中に暮らし、酒と詩とを樂しむ、耕読自適の生活であった。

作品はすべてで百三十首、うち四言詩九首以外はすべて五言詩である。宮廷貴族のサロン文学が

主流をなしていた当時において、独自に田園の生活を歌い、隱逸詩人の宗(本家)といわれた。

【解説】 「雜詩」と題する、十二首中の、最初の作品である。雜詩とは、無題詩であって、その時々

の感想などを詩にうたったものである。この十二首を一時の作とすれば、第六首に(奈何せん五十

の年)の句があるところから、五十歳の作となる。

人間は時をのがすことなく行樂すべきであることを勧めた作であり、ことに最後の四句は、格言

として、後人の教訓となっている。

【読み方】

《根蒂》は(こんたい)と読むのもある。

【語釈】 *根蒂：根底と同義である。蒂は花や果実のつく「へた」であるが、この場合は根もとの

意である。 *飄：風に吹かれて動く状態。 *陌上：路上の意。 *常身：永遠に変化のない身体。

*落地爲兄弟、何必骨肉親：「論語」顔淵篇に、「君子敬而無失、與人恭而有礼、四海之内、皆

兄弟也、君子何患乎無兄弟也」(君子敬して失うこと無く、人と恭しくして礼有らば、四海の内皆

兄弟なり。君子何ぞ兄弟無きを患えんや)とあるによる。また、蘇武の「李陵に与うる詩」(文選)

に「四海皆兄弟、誰爲行路人」(四海皆兄弟たり、誰か行路の人爲らん)とある。落地はこの世に

生まれおちること。 *斗酒：斗とは、もと酒をくむ器の名。斗酒で、大盃になみなみについだ酒。多量の酒の意。 *比隣：隣近所の人びと、また家々。 *盛年：二十から三十までのさかなな年。

*不重：二度とは来ない。強い否定。 *及時：よい機会をのがさずに。 *勉励：充実した時を過ごすようにつとめ励む。

【通釈】 人の一生はしっかりとつなぎとめておく根もともない。それは、ちょうど風に吹かれて飛び散る路上の塵のようなものだ。風のまにまに吹きとばされ、ころがりゆくこの身体は、もとより一定不変のものではない。この世に生まれおちれば、われわれ人間はだれもが兄弟のようなものだ。どうして骨肉を分け合った者だけが、親しいものであるうか。だから、楽しみのないこの憂き世では、欲びを得たなら、当然楽しみをつくすべきだろう。一斗の酒でもあったなら、隣近所の人びとを集めて、大いに楽しみ、飲もうではないか。若い時代は二度と来ないし、一日のうちに朝は二回は来ない。よい機会をのがさずに、充実した時を過ごすようにつとめ励むべきだ。歳月はどんどん流れ去り、人を待ってはくれないのだから。

【鑑賞】 陶潜の詩の中でも、ことに有名な詩であり、解説の項でも触れたように、後半の四句、すなわち、(盛年重ねて来たらず、一日再び農なり難し、時に及んで当に勉励すべし、歳月は人を待たず)は、格言として人びとの口にのぼり、もてはやされている。しかしそれは、陶潜の意図する方向とは反対のものだ。一般に、格言としては、「若い時は二度とこない。だから、一生懸命に勉学に勉めよ」の意に用いているが、作者は、人生は無常そのものであるから、「機会をのがさずに行樂すべし」と詠じているのだ。

行樂すべき時期をのがすことなく、行樂せよ。という発想は、「古詩十九首」などにもみられる。例えば、「生年は百に満たざるに、常に千載の憂いを懐く、昼は短くして夜の長きに苦しむ、何ぞ燭を秉って遊ばざる、楽しみを為すは当に時に及ぶべし、何ぞ能く来茲を待たん。愚者は費を愛惜して、但だ後世の嗤いと為るのみ、仙人王子喬は、与に期を等しうすべきこと難し」(その十五)と、生命のはかなさを嘆じ、若い時のふたたび得難いことを惜しんで、世の中の愚か者をそしっている。また、楽府の「西門行」も語句の同じものを使用している。これを備考の項に掲載しておくので、参考にしてほしい。

戦乱の世の中で、せめて、隣近所の人びとと愛し合うという人間愛を感じとることが出来る。陶潜の、隣人を招いて、鶏をつぶし、園中の蔬(やさい)を肴に、夜明けまで酒盛りをしている句は、「歸園田居」のその五にも見い出ることが出来る。